

お互いに驚きの連続となった、中学生たちの国際交流。 それは、人生観まで変えてしまうほどの衝撃だった。



みんなで田植えも行った



初めて体験する
高床式家屋



指さし式会話でコミュニケーションをとる子ども達

「勉強する時間があるなら、家事を手伝っておくれ」
子の教育に対して、そう考えなければ生活していけない地域が世界にはまだまだ多い。日本国際交流センターが支援する各国の貧困層もそのひとつだろう。そんな現状の中、同センターは昨年、日本、タイ、ラオスの中学生たちの交流研修を行った。その経験は日本の子どもたちにとっても貴重な財産になったようだ。

高床式の家の床下に水牛がいて、
にわたりの声で目覚める生活を体験。

地球温暖化の影響もあるのか、ここ数年、東南アジア諸国では大規模な水害が多い。この状況が数年続けば、農業に頼る人々の生活はさらに逼迫し、とても子どもたちの教育にまで手が回らない。ラオスの貧困地域では小学校卒業率はわずか10～20%でしかない。

日本国際交流センターは20年もの間、こうしたタイ、ラオス(10年間)、カンボジア(4年間)の子どもたちを支援してきた。そのメインの活動となるのが、ダルニー奨学金である。これは年に1万円の寄付で、各国の小・中学生を支援するもので、同センターでは教育里親制度と表現している。里親になると奨学生の写真付き報告書が届き、自分

がどの子を支援しているのかがわかる仕組みだ。

もっと手軽な寄付活動として「書き損じはがき」の提供なども呼び掛けている。書き損じはがきが250枚、あるいは未使用のテレカが30枚もあれば1万円相当になり、それだけでタイやラオスの子ども1人が1年間学校教育を受けられるという。こうした誰でも気軽に参加できる寄付活動が同センターの特長だ。ほぼ寄付金だけで運営しているということだから、地道ながらも、たいへん熱心な活動を続けているのがうかがえる。

そして今年20周年記念事業として行ったのが、タイ・ラオス・日本の中学生による「生活文化交流」である。3国からそれぞれ約10人(加えて先生が3人)が参加し、各国1人ずつの3人が1組になり、タイの家庭にホームステイをした。日程は2007年7月28日～8月4日だが、派遣する日本の学校の選定が5月から始まり、6月には選ばれた子どもたちが準備活動に入り、10月に報告会を行ったので、半年にわたるプロジェクトである。

「それは驚きの連続でした」今回の体験をある日本の中学生はそう述べた。

高床式の家、段ボールでできた壁、道ばたで売られている魚、床下の水牛、水をかけるだけのお風呂、そして真っ暗な闇夜。ひよろりと痩せているタイやラオスの子どもたち。日本の中学生にとっては見るもの、聞くものすべてが驚きの体験だった。

研修で日本の家族について紹介した生徒がいた。家の写真をみせた。物にあふれていた。しかし、家族の団らんの写真は少ない。一方でホームステイをした家は大家族だ。子どもが数人、父母、祖父母、犬、猫、にわとり、そしてヤモリ。家族には笑顔が絶えない。おばあちゃんは家族みんなの相談役になっていた。子どもたちは家族を手伝い、自分にできることはなんでもこなし。自由時間になっても、もっと家族の手伝いがしたいという現地の子どもさえる。それを見た日本のある生徒は「この国では家族が機能していると感じた」と報告書に書いた。

そして「ラオスやタイの子どもたちがうらやましい。裕福であるよりも家族がもっといっしょに暮らせる方がいい」と彼は語った。今度はそれを聞いたタイ・ラオスの中学生が驚いた。裕福な日本人が自分たちを羨むということなど想像もしなかったのだ。「なぜ、日本人は祖父母と暮らさないのか？」そう質問されて答えられない生徒もいた。

「裕福なことが幸福なこととは言えない」
わずか10日間でたくましく成長した子どもたち。

もうひとつ子どもたちに衝撃を与えたのは、現地の学習環境だった。学校が学校にはとても見えない。ラオスの学校はぬかるみの上に建っている藁ぶきの建物だった。ノー

トには端の端までびっしりと小さな文字が書き込まれている。それほどノートは貴重なのだ。インターネットも使えず図書館の蔵書も少ないから、子どもたちはわき目もふらずにメモを取っている。上級生が後輩たちの散髪をしている姿もみた。日本の中学生は、異口同音に「自分たちがいかに恵まれているのか」を思い知ったと語った。

しかし、日本の中学生も単に驚いているだけではなかった。言葉は通じなくても、ジェスチャーなどを交えてコミュニケーションを図り、すぐに仲良しになれた。最初は不安だった生活にもすっかり慣れ、不便を不便と感じなくなり、最後は自分の家にいるぐらいの気持ちになったという。わずか10日間の間ではあったが、まったく異なる価値観と触れあうことで、日本の子どもたちは目に見えるほどの成長をしたようだ。

こうした研修をもっと多くの子どもたちが体験すれば、「いじめ」に代表される多くの問題は解消されるのではないだろうか。ぜひできる範囲で継続していただきたいプロジェクトである。そのためにもご自宅に「書き損じはがき」のある方、ぜひご協力ください。

一年に一万円で
タイ・ラオスの子どもを学校へ

ダルニー奨学金



私たちの子守りをする未来学校のレアンちゃん（ラオス、セーコン県）
（撮影：青島 秀孝）

ダルニー奨学金は、貧困のため教育の機会に恵まれないタイの東北地方と、ラオスの子どもたちの進学を支援する、国際教育奨励システムです。
あなたからの年一万円が、一人の子どもの人生を変え
ることができるのです。

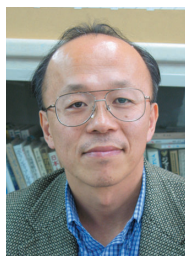
日本民際交流センター
〒162-0041 東京都新宿区早稲田町518 同ビル301
TEL: 03-5292-3260 FAX: 03-5292-3510
Eメール: info@minsai.org
ホームページ: <http://www.minsai.org/>

郵便振替用紙付パンフレット
現地の教育事情や奨学金のしくみ等の
説明が載っている

日本民際交流センター



企画開発室長
本田多衛子さん



事業推進部
富田直樹さん

●担当者より

助成金の使い方の自由度に感謝。

今回、AJOSCさんの助成を受けることで、貴重な研修を実現できたことをありがたく思っています。また、こちらを信頼していただいて、助成の範囲もある程度自由な形で利用できたことも、忙しい中で助かりました。子どもたちの成長ぶりに本当に目を見張りました。今回のような大きなイベントは体力的にもたいへんですので毎年というわけにはいきませんが、ホームステイや奨学金制度はずっと続けていきます。